

幸せの国・ブータンの メリーポピーたち

松永秀和

8 花を求めてブータン紀行

メコノプシス・スペルバ



ツォンサカ 標高 4100m



ハ県チショルンバ 標高 4200m

平原に積もった新雪、真っ白のウエディングドレス。白は「純潔」や「穢れのなさ」を現す色である。ヨーロッパでは白ユリは「マドンナ・リリー」と呼ばれ、処女懐胎した聖母マリアに捧げられていた。光学的にいえば、ものが白く見えるのは七色あるすべての色を反射するからである。どの色にも染まらない、つまり拒否だ。純白のウエディングドレスを着た花嫁は「もう、私に近寄っちゃダメ」と周りの男性に警告を発しているわけである。

花の世界ではどうだろうか。花（被子植物）が種を増やすのは虫との共同作業だ。虫に花粉を運んでもらわないと、受粉して実（種）を残せない。そのため、人間の男女の関係にも似た手練手管を繰り出す。その最たるものが色である。赤は赤外線が見える虫に、青は紫外線に反応する虫に存在を訴え、誘引する。雌しべ周囲の色パターンは蜜標で、虫に「ここに蜜がある」と教える。また、匂いや形で虫を誘惑する花も多い。花間の競争は、女の戦いにも似た熾烈なもので、そのために多大なエネルギーを使っている。白花は色素を作るために栄養を使う必要がなく、その分を成長に回せるが、種を残す可能性は低くなる。

ハ県の固有種であるメコノプシス・スペルバは2mを超す大型の青いケシで、花は純白。白ユリは匂いで虫を呼び寄せるが、この花は匂わない。また、花の形も虫が雨宿りできる形ではない。どのように虫を呼んでいるのか、不思議である。